エリクソンの＜vital involvement＞と異世代間の相互形成

鬢 櫛 久美子

はじめに

エリクソン（E. H. Erikson）は、フロイト（S. Freud）以降の精神分析理論の流れの中で、フロイト学派と同義と見做される自我心理学派に分類されている。エリクソンは、1994年91歳の生涯を終えるまでの60年あまりの長い研究生活において、フロイトにこだわり自我心理学を対象関係論的に展開させ、社会的、文化的、歴史的人間理解を目指した。エリクソンは、「フロイトが、物理的エネルギーに関する諸概念を心理学に応用したことは、計り知れないほど重要な第一歩であったわけだが、しかし、閉じた体系におけるエネルギーの転移、置換、変形という理論的モデルを一方的に重視することは、歴史的・文化的環境内の人間を眺める際に我々が扱うデータを処理するには、既に不十分なのである」[1]と、フロイトの功績を認めながらも、純粋な自我を前提にした個体主義的人間観、力学をモデルにした自然科学的な発想である心理生物的な理論の限界を指摘している。フロイト理論が「閉じた体系」として人間を捉えたのに対し、エリクソンは相互性（mutuality）という概念を用いて異世代間の相互形成論を展開した。

エリクソンの理論は、精神分析学、精神医学、心理学のみならず、教育学、社会学、政治学、宗教学、人類学などの多種多様な領域から関心をもたれた。しかし、わずかな例外を除いて、エリクソンの理論の一部や、彼の彫琢した概念が単独に論じられるに過ぎず、理解するスタンスが弱かった。

先の研究[2]では、エリクソン理論を包括的に理解することを目的とし、Virtue概念を基軸に、漸成的発達図式（epigenetic chart）の生成発展過程を吟味検討し、以下の見解が導きだされた。

エリクソンの理論は、精神分析家が人間の葛藤を手がかりに練り上げた人間の実存に根ざした発達理論である。そしてその中心に置かれた漸成的発達図式は、発達と教育の関係を考察する際にわれわれに新しい地平を切り拓く教育のメタ理論である。

漸成的発達図式を教育のメタ理論として捉えたとき、そこから導きだすことのできるテー

ゼは何であろうか。これが本論文のテーマである。

1．＜生き生きとしたかかわり合い（vital involvement）＞と virtue

エリクソンは、人間の発達を「重要な中心性－感覚を、各段階ごとに、次第に増加していく他者との関係の中で再生して」[3]いくことであると考えた。中心性－感覚とは、生き生きと（vital）積極的に生きている感覚であり、この感覚は、他者との＜かかわり合い＞の中で獲得されるものである。各発達段階において、生き生きと生き、そして発達していくための基盤である＜生き生きとしたかかわり合い（vital involvement)＞を可能にするのが virtue であり、異世代間の＜生き生きとしたかかわり合い＞が virtue の獲得を可能にしていることに最終的に行き着いたわけである。＜生き生きとしたかかわり合い＞はエリクソン理論の中心的構成概念であり、人間存在と人間形成の前述語的基盤であると考える。　そこで漸成的発達図式を、virtue と vital involvement に焦点を当てて読み解くことにする。

エリクソンは、「漸成論（epigenesis)」という語は、「epi は空間では『上』、時間では『前』を意味し、genesis（創生）と結びつくことによって、すべての発達の時間空間的性質をうまく表現することができる」[4]と述べている。漸成的発達図式そのものを検討の対象として、使用されている用語を手がかりに議論を展開していくことにしよう。漸成的発達図式は、理論化の深まりとともに説明概念が増えている。エリクソンの漸成論は、図表２－１、２の漸成的発達図式を中心とし、それを補完する、図表１－１、２と図３－１、２を加えた３つの図表を理解してはじめて完全なものとなる。３つの図表を照合しながら進めていきたい。

図１－１、２から順番に検討していくことにする。この図表は、1956 年に発表した論文に記載されたものが、理論化の深まりとともに、変更と拡張がなされたものである。ここには、発達段階と発達の諸領域が要約されている。

エリクソンは、８つの発達段階を自我の「心理社会的危機」（B）に応じて規定している。ここで言う危機とは、高度の成長潜在力を秘めていると同時に、葛藤が増大する段階を表している。破局的な意味から区別するために、「正常な発達の危機（normative crisis)」[5]という言葉も使われている。危機とは、良くなるか悪くなるかの峠、すなわち決定的な分かれ目（turning point）を意味する。従って、危機は二つの側面から成り立ち、同調傾向（syntonic tendency）と失調傾向（dystonic tendency）という一対の用語（double terms）で表現される。

（Ⅰ）基本的信頼から（Ⅷ）統合に至るまでの同調傾向が、（Ⅰ）基本的不信から（Ⅷ）

絶望に至るまでの失調傾向を凌駕し、各々の危機が解決されると（Ⅰ）希望から（Ⅷ）英知に至るまでの「基本的強さ（basic strengths)」、(D)すなわち virtue が獲得されるのである。危機の解決は、2つの傾向のバランスによる。virtue は、両傾向の「好ましい割合の永続的産物」[6]なのである。生き生きと健康であるための人格特性 virtue に対し、逆に人生に生き生きとかかわる機会を少なくする「不協和特性」(E)が病的なものの核として規定されている。これは、危機における2つの傾向のバランスが悪い場合に生じるのである。従って、同調傾向も失調傾向も、また協和特性も不協和特性も共に人間が発達して行く上で避けることのできないものである。

心理社会的危機は、成長と共に拡大する社会的範囲の中で行われる相互交渉（inter-play）という「生き生きとしたかかわり合い（vital involvement)」[7]によって解決されていく。この<かかわり合い>の「重要な関係の範囲」は、(C) の欄に示されているように、母親から始まり、家族、最後には、人類や自分の種族にまで広がっていくのである。

そしてこの世代間の<かかわり合い>の説明概念が、「儀式化」(G) である。「儀式化」

図1－1　出典、エリクソン『ライフサイクル、その完結』p.34.

発達段階	A 心理・性的な段階と様式	B 心理・社会的危機	C 重要な関係の範囲	D 基本的強さ	E 中核的病理基本的な不協和音傾向	F 関連する社会秩序の原理	G 統合的儀式化	H 儀式主義
Ⅰ　乳児期	口唇－呼吸器的、感覚－筋肉運動（取り入れ的）	基本的信頼 対 基本的不信	母親的人物	希　望	引きこもり	宇宙的秩序	ヌミノース的	愚象崇拝
Ⅱ　幼児期初期	肛門－尿道的、筋肉的（把持－排泄的）	自律性 対 恥、疑惑	親的人物	意　志	強　迫	「法と秩序」	分別的（裁判的）	法律至上主義
Ⅲ　遊戯的	幼児－性器的、移動的（侵入的、包合的）	自主性 対 罪悪感	基本家族	目　的	制　止	理想の原理	演劇的	道徳主義
Ⅳ　学童期	「潜伏期」	勤勉性 対 劣等感	「近隣」、学校	適　格	不活発	技術的秩序	形式的	形式主義
Ⅴ　青年期	思春期	同一性 対 同一性の混同	仲間集団と外集団：リーダーシップの諸モデル	忠　誠	役割拒否	イデオロギー的世界観	イデオロギー的	トータリズム
Ⅵ前成人期	性器期	親密　対　孤立	友情、性愛、競争、協力の関係におけるパートナー	愛	排他的	協力と競争のパターン	提携的	エリート意識
Ⅶ　成人期	（子孫を生み出す）	生殖性 対 停滞性	（分担する）労働 と （共有する）家庭	世　話	拒否性	教育と伝統の思潮	世代継承的	権威至上主義
Ⅷ　老年期	（感性的モードの普遍化）	統合　対　絶望	「人類」 「私の種族」	英　知	侮　蔑	英　知	哲学的	ドグマティズム

Stages	A Psychosexual Stagesand Modes	B Psychosocial Crises	C Radius of Significant Relations	D Basic Strengths	E Corepathology Basic Antipathies	F Related Principles of Social Order	G Binding Ritualizations	H Ritualism
I Infancy	Oral-Respiratory, Sensory-Kinesthetic (Incorporative Modes)	Basic Trust vs. Basic Mistrust	Maternal Person	Hope	Withdrawal	Cosmic Order	Numinous	Idolism
II Early Childhood	Anal-Urethral. Muscular (Retentive-Eliminativ)	Autonomy vs. Shame, Doubt	Parental Persons	Will	Compulsion	"Law and Order"	Judicious	Legalism
III Play Age	Infantile-Genital, Locomotor (Intrusive, Inclusive)	Initiative vs. Guilt	Basic Family	Purpose	Inhibition	Ideal Prototypes	Dramatic	Moralism
IV School Age	"Latency"	Industry vs. Inferiority	"Neighborhood," School	Competence	Inertia	Technological Order	Formal (Technical)	Formalism
V Adolescence	Puberty	Identity vs. Identity Confusion	Peer Groups and Outgroups; Models of Leadership	Fidelity	repudiation	Ideological Worldview	Ideological	Totalism
VI Young Adulthood	Genitality	Intimacy vs. Isolation	Pertners in friendship, sex, competition, cooperation	Love	Exclusivity	Patterns of Cooperation and Competition	Affiliative	Elitism
VII Adulthood	(Procreativity)	Generativity vs. Stagnation	Divided Labor and shared household	Care	Rejectivity	Currents of Education and Tradition	Generational	Authoritism
VIII Old Age	(Generalization of Sensual Modes)	Integrity vs. Despair	"Mankind" "My kind"	Wisdom	Disdain	Wisdom	Philosophical	Dogmatism

図1－2　出典、Erikson The Life Cicle Completed pp.32-33.

がうまく行われれば危機は解決され、virtue が生み出される。しかし、virtue を弱める（偶像崇拝からドグマティズムに至る）「儀式主義」（H）に退落する危険を持っている。個人の発達における否定的側面である「不協和特性」と社会の構造の否定的な面の「儀式主義」とは、力動的な関係にある。各人生段階の「儀式化」は、その社会構造内の主要な諸制度の１つ及びその社会の諸儀式と対応している。（F）の欄は、<かかわり合い>により学び取られる社会的秩序の原理を表している。

各心理社会的発達段階は、その基礎となっているフロイトの心理性的段階説と比較する目的で、「心理性的な段階と様式」（A）が書かれている。

この図表は、エリクソンの、人間の実存は、生物学的過程と、精神的過程と、共同的過程という相互に補完しあう３つの体制化過程に依拠している、という仮定を見事に説明していると考える。

図２－１、２は、『幼児期と社会』以来「漸成的発達図式」（epigenetic chart）と名づけられてきたものである。これは、誕生から死に至るまでの心理社会的発達の諸段階の継列を表している。縦方向は、下から上に順番に８つの発達段階が示されている。図の対角線をなす四角の桝目には、すでに述べた同調傾向と失調傾向の一組と、これら２つの傾向のバランスにより発達する virtue が書かれている。それぞれのステップの発達は、図示

図２－１　出典、エリクソン『ライフサイクル、その完結』p.73.

老年期 Ⅷ								統合 対 絶望、嫌悪 英知
成人期 Ⅶ							生殖性 対 停滞 世話	
前成人期 Ⅵ						親密 対 孤立 愛		
青年期 Ⅴ					同一性 対 同一性混乱 忠誠			
学童期 Ⅳ				勤勉性 対 劣等感 適格				
遊戯期 Ⅲ			自主性 対 罪悪感 目的					
幼児期初期 Ⅱ		自律性 対 恥、疑惑 意志						
乳児期 Ⅰ	基本的信頼 対 基本的不信 希望							
	1	2	3	4	5	6	7	8

された段階で優勢になる。そして、それ以外の空白の桝目が重要な意味合いを持っていることに注意をしなければならない。すなわち、垂直方向は、各 virtue が発達する段階よりそれ以前の全ての段階に根を下ろし、それ以後の段階でも常時発達を続けることを表している。一方、水平方向は、virtue が、前段階の virtue を前提とし、順にその上に積み上げられていくことを示しているのである。

図３－１、２は、人が自分の人生に「生き生きとかかわる」機会を少なくするような「悪性の発達（maladaptive tendency)」と「悪性傾向（malignant tendency)」についての表である。「適応をもたらす力」の欄には、社会的危機を表す一対の用語と、それらのバランスにより獲得される virtue が書かれている。

「悪性の発達」は心理社会的な危機において、失調傾向を弱めてしまおうとするあまり、同調傾向に重点を置いて発達させ過ぎ、バランスを崩した結果として起きる不適応である。臨床的には、「神経症的」な障害となる。

一方、「悪性傾向」は同調的な傾向の喪失をおそれるあまり、失調的な傾向が誇張されすぎる場合に、結果として起きる。こちらは、「精神病的」な障害を生むことが予想される。この「悪性傾向」は図１－１、２においては、virtue の対概念として不協和傾向と名付けられている。「悪性の発達」、「悪性傾向」のいずれも、同調傾向と失調傾向のバラ

図２－２　出典、Erikson The Life Cycle Completed pp.56-57.

	1	2	3	4	5	6	7	8
Old Age Ⅷ								Integrity vs. Despair: disgust. WISDOM
Adulthood Ⅶ							Generativity vs. Stagnation. CARE	
Young-Adulthood Ⅵ						Intimacy vs. Isolation. LOVE		
Adolescence Ⅴ					Identity vs. Identity Confusion. FIDELITY			
School Age Ⅳ				Industry vs. Inferiority. COMPETENCE				
Play Age Ⅲ			Initiative vs. Guilt. PURPOSE					
Early Childhood Ⅱ		Autonomy vs. Shame, Doubt. WILL						
Infancy Ⅰ	Basic Trust vs. Basic Mistrust. HOPE							

図３－１　出典、エリクソン『老年期 』p.41.

適応をもたらさない傾向		適応をもたらす力			悪性傾向
Ⅰ	（感覚的不適応）	信　頼	希　望	不　信	（退　行）
Ⅱ	（恥知らずなわがまま）	自　律	意　志	恥・疑惑	（強　迫）
Ⅲ	（残　忍　性）	自発性	決　意	罪悪感	（抑　制）
Ⅳ	（狭い技巧）	勤勉性	才　能	劣等感	（不活発）
Ⅴ	（狂　信）	アイデンティティの凝集	忠　誠	役割の混乱	（放　棄）
Ⅵ	（無差別）	親密性	愛	孤　独	（排他的）
Ⅶ	（過剰な拡大）	生殖性	世　話	停　滞	（拒　否）
Ⅷ	（無遠慮）	統　合	英　知	絶　望	（侮　蔑）

図３－２　出典、Erikson Vital Involvement in Old Age p.45.

	Maladaptive Tendency	Adaptive Strength			Malignant Tendency
Ⅰ.	(Sensory Maladjustment)	Trust	HOPE	Mistrust	(Withdrawal)
Ⅱ.	(Shameless Willfulness)	Autonomy	WILL	Shame／Doubt	(Compulsion)
Ⅲ.	(Ruthlessness)	Initiative	PURPOSE	Guilt	(Inhibition)
Ⅳ.	(Narrow Virtuosity)	Industriousness	COMPETENCE	Inferioity	(Inertia)
Ⅴ.	(Fanaticism)	Identity Cohesion	FIDELITY	Role Confusion	(Repudiation)
Ⅵ.	(Promiscuity)	Intimacy	LOVE	Isolation	(Exclusivity)
Ⅶ.	(Overextension)	Generativity	CARE	Stagnation	(Rejectivity)
Ⅷ.	(Presumption)	Integrity	WISDOM	Despair	(Disdain)

ンスが悪く適応をもたらす力である virtue を生みだすことができない場合に生じる。

例えば、第1の段階において過剰な信頼がおこると、表の「悪性の適応傾向」に書き表されているように、不適応となる。逆に、不信の感覚が誇張されるようなアンバランスな状態に置かれたままでいると、「悪性傾向」である退行への強い流れが生じ、人生へのかかわりを忌避する。つまり、図1－1、2の不協和傾向にあるように引きこもりの状態となるのである。

図1－1、2と図2－1、2を重ねあわせると、幼児期から青年期を経て老年期に至るまで人と人との＜かかわり合い＞の半径が絶えず広がっていき、社会的秩序の新しい領域と接触するようになるにつれ個人的に発達し、また、個人的に発達するからこそ＜かかわり合い＞の範囲が広がる。したがって、発達とは＜かかわり合い＞が広がることであり、＜かかわり合い＞のなかで、心理社会的危機の同調傾向と、失調傾向のバランスから virtue が生まれることである。

図3－1、2では、同様に心理社会的危機の同調傾向と、失調傾向のバランスから生まれる virtue が生き生きとした＜かかわり合い＞の適応をもたらす力として規定されている。

以上3つの図表から得られた1つめの結論をまとめる。

人間の発達が健康に生き生きと継起していくために、各発達段階においてその根底にある倫理的な側面として virtue が獲得される必要があり、獲得された virtue が生き生きとした＜かかわり合い＞をもたらし、次の段階への発達を可能にするのである。

「健康な子どもは、適切な導きを得れば、意味ある諸経験の継列の中で、漸成的な発達法則に沿った発達を順調に遂げていくと信頼して差し支えない」というのが、エリクソンの発達と教育に関する基本的原理である。従って、第一番目のテーゼは、次のようになる。

教育とは、各発達段階において生き生きとした＜かかわり合い＞の適応力である virtue を獲得できるように＜かかわり合う＞ことである。[8]

2．ライフサイクル論と異世代間の相互形成論

これら3の図式は全て、8つの「人生段階（stages)」からなる。そしてこの8つの人生段階を連続したひとまとまりとして、「ライフサイクル」と呼ぶのである。ライフサイクルは、「個体のライフサイクル（the individual life cycle)」[9]であると同時に、「世代間的ライフサイクル（the intergenerational cycle)」[10]をも表している。

「個体のライフサイクル」とは、死によって完結する個人の一生涯を指している。「世代間的ライフサイクル」とは、世代継承的なライフサイクルである。前者はそれぞれの図表から、単純に読み取れる部分もある。後者は、かなり説明が必要である。いずれも、詳述し、強調すべき点を明確にすべきである。なぜなら、ここにエリクソンの理論の<かかわり合い>への言及が見られるからである。ここではエリクソンのライフサイクル論の二重性について論じる。エリクソンのライフサイクルを次のように解釈することがエリクソンのライフサイクル論理解への方途であると考える。

「世代間的ライフサイクル」は、１つの世代が前の世代に生み育てられ、次の世代を同様に生み育てるといった単純な世代継承として理解されがちであるが、１つの世代は他の発達段階にある各世代と相互に複雑に交叉しているという意味に読み取るべきである。さらには、「ライフサイクル」を「個体のライフサイクル」と「世代間的ライフサイクル」を繋ぐ連鎖として理解すべきだと考える。

まず第１に着眼しなければならないことは、図２－１、２の対角線以外の空白の桝目である。

「漸成的発達図式は互いに依存し合う諸段階の体系を表している。そして、個々の段階を徹底的に探究し、それにふさわしい名称を付けようとも、それらの研究は、段階全体の形態を心にとめて常に行わなければならないことをこの図式は示している。それゆえこの図式はその空白のすべての欄について一考するように促している。」[11]『幼児期と社会』に漸成的発達図式を発表した時点では、あたかも研究が進めば、この空白部分にも相応しい名称が付けられるのではないかと、期待させるような文章も見られる。しかし、「この図式を見る時には、水平方向の欄も垂直方向の欄も全て、例えば（ある特性の）初期の状態としてあるいは明らかに必然的に生ずる後期の結果として、発達的に相互に深く関係するものとして考えねばならない」[12]と述べて、漸成的発達図式の空白部分は最後まで埋められることなく、空白の桝目を強調することで、発達の内的論理が説明されてきた。

漸成的発達図式は、人が特有の時（proper time）に、特有の発達（proper development）をすることを示しているばかりではない。対角線部分以外の空白のままの部分は、「人がその時に問題となっている緊張とだけ戦っているのでは決してないことを如実に示唆している。むしろ、連続する発達段階のその時々において、人はまだこれから問題になるはずの緊張を予感」[13]するのである。また、今おかれている発達段階において、過去に問題となったテーマをその年代に相応しい形で「再経験（reexperiencing）」し、「修正（modification）」する。つまり、「前にあった葛藤は、現在の発達レベルに関連して再び解決しなければならない」ことを示している。[14]

漸成的発達図式の空白の部分の意味するところが理解できた。次に、対角線部分の各発

達段階ごとの発達のテーマを重ねて、図式を読み込むことにする。複雑な各発達段階の＜かかわり合い＞を論じるには、ひとつの発達段階にしぼってそのステージで議論するのが賢明だと考える。ここでは、個人のライフサイクルと世代間のライフサイクルの連鎖が顕著な成人期を取り扱う。

成人期にある人間は、その世代のテーマである生殖性対停滞という心理社会的危機の葛藤（Ⅶ－７）を経験する。実際の生活の中で、子どもを生み育てたり、労働を通して生産的創造的な活動をする。生殖性対停滞の危機から現れる virtue は、世話である。世話は、これまで大切にしてきた（care for）人や物や観念の面倒を見る（take care of）ことへの、より広範な＜かかわり合い＞である。すなわち、世話は各人生段階をまとめて１つの人生のサイクルを創り出し、新しく生まれた者の中にサイクルの始まりを再創造する。これらの同じ経験が、ライフサイクルの連続性をまとめて世代的サイクルを創り出し、最終的には、その世代に生命を与えた世代とその世代が生命を育む責任のある世代の三代を結びつける。そして過去において問題となったテーマ、例えば、青年期の同一性対同一性の混乱（Ⅶ－５）についても、新しい存在や、新しい制作物や新しい観念を生み出すことで、自分自身の更なる同一性の開発に関わる一種の自己－生殖（self-generation）することで、再経験し、修正を試みているのである。

成人期にある人間が、個体としてのライフサイクルを生きるということは、世話を通して、子どもや老人と＜かかわり合い＞、労働を通して同世代の人ばかりではなく、前成人期や青年期の人々とも＜かかわり合い＞、必然的にその世代以外のテーマにも取り組まざるをえない状況に置かれることである。ここに、異世代との相互作用が生まれるのである。この相互作用をエリクソンは次のように述べている。「人間が心理社会的に生存できるのは、繋がり、重なりあっている（体制化された状況のなかで共に生きている－living together）世代の相互交渉の中で発達する生き生きとした virtue に守られているからである。ここで言う、共に生きるということは、偶然近くに存在するという以上のことを意味する。すなわち個人の諸ライフステージは、他者の諸ライフステージと相互作用しながら生きている（interliving）、つまり彼が他者を動かすにつれて彼も動くはめこみ歯車のような関係を意味するのである。」[15]

自分のライフサイクルを他者との＜かかわり合い＞のなかで生きながら、他世代に生きる人のライフサイクルと、密接にしかも複雑に絡み合うようにかかわるのであるから相互作用というよりは、この＜かかわり合い＞は、異世代間の相互形成である。異世代の他者のライフサイクルとかかわることで、「個としてのライフサイクル」が成立ち、他世代のライフサイクルを成り立たせ、かつ「世代間のライフサイクル」へと連鎖していることになるのである。

エリクソンのライフサイクルの二重性が、１つの世代は他の発達段階にある各世代と相互に複雑に交叉し、「個体のライフサイクル」が「世代間的ライフサイクル」へと繋がっていることが理解できた。ライフサイクルの二重性は、アイデンティティについても常に全人類的なアイデンティティを志向し、模索したエリクソンの研究者としての倫理性に支えられたものであることを付け加えておきたい。

以上、発達を成人期までのものではなく、一生涯に渡るものとして捉えたエリクソンのライフサイクルの議論からは、特定の世代が特定の世代にかかわるのではなく、すべての世代が相互に複雑にかかわり合っていることを読み取ることができた。

ここで導きだされる第２の教育へのテーゼは、次のように言うことができる。

＜かかわり合い＞は異世代間の相互形成であり、教育である。

３．＜かかわり合い＞の非対称性と相互性（mutualiy）

漸成的発達図式は、精神分析家としての洞察力と、必要性から生み出された発達理論であることは前にも述べた。エリクソンは、臨床家として生きているひとりの人間に向き合っていた。このような経験は、患者と、治療者という「不平等な（unequal）関係」[16]における＜かかわり合い＞のあり方や臨床的方法について、常に吟味することを迫るものであった。エリクソンは、「臨床科学」については以下のように規定している。

「生きているひとりの人間に対する科学的な方法というのは、現在生活しているものの研究にふさわしい概念と方法でなければならない。生きているもの（living beings）の本質について学ぶためには、彼らとともに（with）何かをするあるいは、彼らのため役立つように（for）何かをすることによって本当に学ぶことができる。これが臨床的科学（clinical science）の原則である。」[17] エリクソンの臨床家としての方法論は、「ともに何かをするあるいは、彼らのため役立つように何かをすること」という、相互性を目指したコミットメントであることが窺える。

患者と、治療者という「不平等な関係」、つまり＜かかわり合い＞の非対称性については、「患者が患者としてまた人間として治癒して行くと同時に、医者は治療実践家として、また人間として発達して行くのである」[18]と述べている。

漸成的発達図式をベースに表されたエリクソンの発達理論の中では、異世代間の相互形成論の、臨床性、非対称性はどのように論じられているのであろうか。

異世代間の＜かかわり合い＞は、発達段階が異なるのであるから当然非対称なものとならざるを得ない。非対称な＜かかわり合い＞における相互性とはどのようなものか。エリ

クソンの理論からこの問題を検討する。

「本当に価値ある行為は、行為するもの（the doer）と他者（the other）との相互性（mutuality）－他者を強化しているにも関わらず行為者自身をも強化するという相互性を拡大していくものである。このように行為の行為者と他者は、一つの活動におけるパートナーである。

発達的に見れば、行為者は、他者の中に他者の年齢、発達段階、条件に適した強さを活性化させようとしているときにさえ、自分自身の中に自分の年齢、発達段階、条件に適した強さを活性化させることになる。」[19]

ここに引用した文章の中に、エリクソンの異世代間の相互形成論の核心が2点述べられている。

1点目は、行為するもの（the doer）と他者（the other）という言葉の慎重な使用から読み取れる。エリクソンは2者間の＜かかわり合い＞について言及するときも、「主体（subject）」－「客体（object）」という表現はしない。この用語の使用に、一方的にかかわるのではなく互いに作用しあう、＜かかわり合い＞の相互性（mutuality）が読み取れる。

また、＜かかわり合い＞の相手を「客体」、すなわち「主体」の行為の対象として物象化することを避け、活動におけるパートナーとして認めている点は、エリクソンの異世代間の相互形成論の核心である。

2点目は、エリクソンの異世代間の＜かかわり合い＞が、非対称な関係であるにもかかわらず、権力的、権威的となることなく、相互的であるのは、漸成的発達図式により規定された発達理論がその基礎にあるからである。エリクソンは、両者がそれぞれの発達段階に相応しい強さ＝virtue を活性化させるような＜かかわり合い＞をもつことが、相互性の拡大につながると考えている。また、エリクソンは、「相互性とは、それぞれの強さを発達させるためにお互いに信頼しあっているパートナーの関係のこと」[20]だと定義づけている。（I would call mutuality a relationship in which partners depend on each other for the development of their respective strengths.）[21]

2つの核心を総合すると、エリクソンの異世代間の相互形成論は、非対称な関係における相互性を、それぞれの発達段階に相応しい virtue を獲得するようにかかわるという、発達段階の違いを組み込むことで成立させている。

エリクソンの構想する<かかわり合い>とは、「現実吟味のあらゆる方法を利用しながら、各発達段階相互の、自分（the doer）が他者（the other）を生き生きとさせる（actuates, inspires）ように、他者に生き生きとさせられる（is actuated, is inspired)ような発達段階間の相互に影響しあうネットワーク」[22]であり、「相互活性化（mutual activation)」の原理を根幹に持つものである。経験的世界では、「相互に動機づけあい、仕事を分業しあい、共通の研究をする」[23]ような<かかわり合い>のことである。

ここで結論として、次のようなテーゼを挙げる。

異世代間の相互形成としての教育は、発達段階を加味した相互活性化である。

4．<生き生きとしたかかわり合い>の自明性と脆さ

漸成的発達図式の構成概念が各発達段階ごとに、一対の用語（double terms）から成りたっていることに注目したい。図式の説明以来何度も繰り返しているように、心理社会的危機が同調傾向と失調傾向という二つの側面から成り立っている。virtue には不協和傾向、儀式化にも儀式主義という対立命題がある。

エリクソンが健康な発達を常に良性傾向と悪性傾向の両側面から構想していることに、<かかわり合い>に生き生きとした（vital）という形容詞が付けられていることの本意が現われている。エリクソンは、「人間はいかなるとき生き生きとしているのか」という問いをフロイトから受け継いだのであるが、傷ついた人間を前にそれがいかに容易ならぬものかを実感していた。

「健康な子どもは、適切な導きを得れば、意味ある諸経験の継列の中で、漸成的な発達法則に沿った発達を順調に遂げていくと信頼して差し支えないこと、またこれらの発達法則は、次第に数を増す他者や、彼らを支配する社会的習慣との間に意味ある相互作用を成し遂げる潜勢力を子どもの中に生み出していくものだということである。この種の相互作用は、文化によって、大きく異なるが、しかしあらゆる文化はある本質的な『適切な速度』と『適切な順序』を保証しなければならない。」[24]と述べる一方で、「人間的強さの出現が、各発達段階で、いかに本来的に容易ならぬ脆さにつきまとわれているかということ、それだけでなく、この生れつつある強さが、各発達段階で、いかに本来的に根本的な害悪に包囲されているか」[25]を熟考すべきことを提案している。

健康に生活している人間にとっては、<生き生きとしたかかわり合い>をもち、各発達段階ごとに virtue を獲得していくことは、取り立てて意識されることでもない。しかし、一端平常でない状況に置かれたときに、人は<生き生きとしたかかわり合い>をすること

もできなくなり、virtue を獲得することもできない。それなしでは人間のライフサイクルは成り立たないと二重否定の形でしか意識の地平にのぼることがないのが、virtue なのである。

例えば地震災害などで家屋が崩壊し家族も失ってしまうような被害に合った場合には、人生の原初的な基盤である基本的信頼感と基本的不信感のバランスを崩してしまい、引きこもり状態となり、人生そのものに対する希望を見出せなくなってしまう。このようなときには、希望だけでなくそれまでに獲得し、再経験して修正してきた virtue 全てが失われ、アイデンティティの感覚すら持てなくなってしまうだろう。

やがて時がたち、今ある自分を認めることができるようになった時、すなわちアイデンティティの危機を脱することができた時、置かれている状況は何も変っていないにもかかわらず、積極的に生きていくことが可能となる。このようなときに、人生への希望と、自律して生きようという意志や決意が自らの中に戻ったことを感じるであろう。たとえ、そのような言葉に表現することはできなくとも。しかし、もし、身近に漸成的発達理論を理解している人がいたら、このような virtue の感覚が当人の内部に蘇ったことを看て取ることが可能であろう。実際、臨床家は患者が癒されていくときに、このような手応えを感じるそうだ。そして、この感覚がいかに人々との＜生き生きとしたかかわり合い＞に支えられているかを思わずにはいられないだろう。

エリクソンの理論を検討する場合、ともすれば各発達段階の否定的概念を軽視し、エリクソンの主張した＜かかわり合い＞の脆さ、危うさを見落としがちである。＜生き生きとしたかかわり合い＞を追究するのは、目の前の現実がそうではないからなのである。エリクソンが生き生きとしたという語を強調するのは、＜かかわり合い＞という言葉には「そこから逃げることのできない複雑な受動的なかかわり過ぎ、（時には救いようのない絶望的なかかわりあい）といった意味がある」[26]からである。

以上のことから、教育に示唆できることは、次のようにまとめられるだろう。

教育とは、健康な発達をするよう保証するための適切な＜かかわり合い＞である。ゆえに、各発達段階が持つ脆さを十分理解して教育的＜かかわり合い＞をもつことが肝要である。

おわりに

エリクソンの漸成的発達図式を教育のメタ理論として検討したところ、以下のようなテーゼが導きだされた。

1．教育とは、各発達段階において、＜生き生きとしたかかわり合い＞の適応力である

virtue を獲得できるように<かかわり合う>ことである。

2．<かかわり合い>は異世代間の相互形成であり、教育である。

3．異世代間の相互形成としての教育は、発達段階を加味した相互活性化である。

4．教育とは、健康な発達をするよう保証するための適切な<かかわり合い>である。ゆえに、各発達段階が持つ脆さを十分に理解して教育的<かかわり合い>を持つことが肝要である。

以上の4つのテーゼを基軸に、教育を異世代間の相互形成として捉えたとき、エリクソンの<vital involvement>という概念は、教育を成立させるための基盤として、また人間のライフサイクルを支えるものであり、教育の目標として考えるべき概念であるといえる。

そして、エリクソンの<vital involvement>を教育のメタ理論として活用する鍵は、<vital>、<mutuality>、<reexperiencing>、<modification>という説明概念にあることが明らかになった。

－注－

1）E. H. Erikson, *Identity and the Life Cycle:* In Psychological Issues International Universities Press 1959 (W. W. Norton, 1980, p.22.)

2）鬘櫛久美子、「エリクソン理論における漸成的発達図式の検討－virtue 概念を基軸に－」、『教育哲学研究』第66号、1992年、pp.15-28.
—「エリクソンの『発達課題論』の再検討－leading concept としての "virtue" を中心に－」、『名古屋大学教育学部紀要（教育学科）』、第39巻 第1号、pp.69-79.

3）Erikson, *The Life Cycle Completed: A Review*, W. W. Norton, 1982, p.89.

4）Erikson with Joan M. E., Helen Q Kivnick, *Vital Involvement in Old Age*, W. W. Norton, 1986, p.38.

5）Erikson, *Identity and the Life Cycle*, p.125.

6）Erikson, *Childhood and Society*, W. W. Norton, 1963, p.274.

7）Erikson, *Vital Involvement in Old Age*, p.8.

8）8つの発達段階に設定された virtue、希望、意志、目的追究性、適格、忠誠、愛、世話、英知の個々の説明は、鬘櫛久美子、1991年『発達課題の地平—エリクソンの Virture 概念を基軸に－』（修士論文）で詳述した。

9）Erikson, *The Life Cycle Completed*, p.8.

10）Erikson, *Vital Involvement in Old Age*, p.38.

11）Erikson, *Childhood and Society*, p.272.

12）Erikson, *Identity and the Life Cycle*, p.61.

13）Erikson, *Vital Involvement in Old Age*, p.39.

14）ibid., p.40.

15) Erikson, *Insight and Responsibility*, W. W. Norton, 1964, p.114.

16) ibid., p.236.

17) ibid., p.229.

18) ibid., p.236.

19) ibid., p.233.

20) ibid., p.231.

21) ibid., p.231.

22) ibid., p.165.

23) Erikson, *Childhood and Society*, p.423.

24) Erikson, *Identity and the Life Cycle*, p.28.

25) ibid., pp.60-61.

26) Erikson, *Vital Involvement in Old Age*, p.32.